

剣を鋤(すき)へ 平和の道具となる

マタイ26章47～56節
2021年8月08日
松田 基子 師

8月第二聖日は、ナザレン教団に於いて、平和主日と定められて居ます。人類に最も必要なもの、それは平和です。人類は有史以来、平和を求めながら、未だに真の平和を得ていません。その事について、聖書は、人類の**根本的平和は、神様との平和である**ことを教えています。

人間は何故、争い合う様になったのでしょうか。聖書は、創世記3章で、人間が神様に背いた事を記していますが、人間が神様に背く、そのきっかけは、蛇に擬人化されている誘惑者が、女性の代表を唆したところから始まりました。創世記3章1節に、

「蛇は女に言った、

『園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか。』

と問い掛けています。誘惑者の最大の狙いは、神様を**疑わせる**ことでした。神様への不信を掻(か)き立てて、人間を神様に背かせ、神様から引き離し、罪と悪の世界を造って、神様に対抗することでした。

女性の心は無防備でした。彼女は誘惑者が意図した、神様を疑ってみる言葉に耳を傾けてしまいました。彼女は誘惑者の言葉を閉め出すのではなくて、応答しました。2節に、

「女は蛇に答えた。

『わたしたちは園の木の果実を食べても良いのです。でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました。』

と言っています。

しかし、神様は、2章16節で、

「主なる神は人に命じて言われた。

『園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。』

と命じておられます。

実は、この時、女性はまだそこに居ません。女性は神様の命令を、男性から聞いて、自分の都合の良い様に、

「死んではいけないから。」

と神様の命令を和らげています。誘惑者は女性の心を見抜いて、4節に、

「蛇は女に言った、

『決して死ぬことはない。それを食べると目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存知なのだ。』

誘惑者は女性に、神様の愛を疑わせています。

『神様は人間が神様のようにになったら、困るから、善悪の知識の実を、食べさせないのだよ』と疑わせています。

女性は神様を疑い、神様の言葉より、誘惑者の言葉を信じて、自分で実を取って食べ、一緒にいた男性にも渡したので、彼も食べたのでした。そこから、人間の人生は神様を疑い、相手を疑い、疑いから争いの人生、罪と悪を産み出す社会が、今日まで続いています。ところで、一昨日の8月6日は、人類史上初めての、原子爆弾が広島に投下されてから、76年目を迎え、コロナ禍で、縮小されましたが、平和記念式典が行われました。

黒い雨訴訟も、やっと原告勝訴で、国も判決を受け入れ、被爆者健康手帳が交付されました。なんと長い間苦しんで来られた事でしょうか。あの日の、秒速400mの爆風、三千度の熱線と、

放射能を浴びて、人間の極限の苦しみを味わって、亡くなられた方は、その年の12月末迄で、約14万人と言われていています。

76年経った今年、原爆慰霊碑に、納められた原爆死没者名簿には、これまでの累計328,929名の方の名前が納められました。被爆者の方々は、76年もの長い間、自身に受けた放射能が、引き起こす病と、戦いながら、この苦しみを世界中の誰にも、味わわせてはならないと、命がけで、核廃絶を訴えてこられました。核兵器が、人類に壊滅的な被害を与える事が、世界にも共有され、ICANによる核兵器廃絶国際キャンペーンなどの働きによって、今年1月、核兵器禁止条約が発効しました。残念なことに、日本は世界で、唯一の被爆国でありますが、アメリカの核の傘の下にあることから、条約の締約に至っていません。

現在、世界の核保有量は、13,080発と発表されました。1発でも、投下すれば、被害は、広島、長崎との比較にならない、壊滅的被害が予想されています。更なる脅威は、銃、核兵器に次ぐ第3の武器革命として、無人兵器である、ドローンによるパイロットレス戦闘機の開発、AIロボットの開発等です。時代は益々混迷の度を増して行きます。その**根源にあるのは、人間の疑い**です。疑いほど、人を疑心暗鬼にさせ、過剰防衛に走らせるものではありません。

そのために各国とも、莫大な軍備費を使い、多くの国では、防衛費が国民の福祉よりも優先しています。疑いの社会、それは相手を信じられない事であり、最も尊ばれるべき人権が、軽んじられることで、人が人として尊ばれない社会です。この様な世界を、一番心傷め、苦しんで居られるのは、世界の創造主、人間に命と使命を与えて世に送り出された神様です。

神様は人間の祖が神様に背いたその時から、

人間との回復を求めて、歴史を人類の救済史に導いて来られました。神様は全き愛のお方ですが、また、限りなく聖く、完全な正しさをもって居られるお方です。身勝手な人間は、

「神様が愛なら、人間がどんなに罪を犯

そうとも、赦して下さいたら良いではないか。」と言うのです。神様の愛とは、そのようなものではありません。自分の罪を自分で償えない人類のために、神様は、ご自身がその犠牲を負い、罪の無い、神の御子を全き人間として、人の世に誕生させ、御子に、**神の子の値**を以て、人類の**罪を償い、贖わせる事**になされたのです。それがイエス・キリストの**十字架**です。

イエス様も父なる神様と、同じ心で、人類を愛され、ご自身が十字架に架かれることによって、人類の罪が贖われ、罪赦されて人類に救いの道が開かれることを求められました。今朝の聖書箇所ではイエス様は、弟子達と最後の晩餐に於いて、**十字架に架かれる意味**を教えられました。26章26節、27節に、

「取って食べなさい。

これはわたしの体である。」

「皆、この杯から飲みなさい。これは、罪が赦されるように、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。」

と言われました。

食事を終えられると、弟子達を連れて、エルサレムでの祈り場である、ゲツセマネの園に向かわれました。そこでイエス様は十字架を全う出来るように、父なる神様に全信頼して、祈られました。全信頼する故に、心の底からわき上がって来る不安、苦しみを、父なる神様に訴えられました。26章39節に、

「少し進んで行って、うつ伏せになり、祈って言われた。

『父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに。』

と祈られました。

この祈りは、イエス様が父なる神様に全信頼し、全てを委ねられた祈りでした。心を定められたイエス様は3人の弟子の所に戻ってこられ、彼らと話しておられると、そこに12弟子の1人、イスカリオテのユダが、宗教指導者達が、イエス様を捕らえさせるためにさし向けた人々を、手引きして現れました。ユダは、何食わぬ顔でイエス様に対して、

「先生、こんばんは。」

と言って接吻しました。ユダは師に対する敬愛を現す接吻を、イエス様を捕縛する為の合図に使ったのです。

何と言う裏切りでしょうか。イエス様はユダの裏切りをご存知でしたが、一方で、ご自身が十字架に架からなければ、人類の罪の贖いは出来ないことを知っておられました。それでもイエス様はご自身を裏切ったユダを最後まで見捨てることはありませんでした。イエス様は、ユダに、50節で、

「友よ」

と呼び掛け、

「しようとしていることをするがよい。」

と言われました。

ユダがしようとしていたことは、イエス様を当局者側に引き渡すことでした。イエス様はご自身をそのように裏切ったユダに対して、罰するどころか、尚関係を切ることなく、

『あなたを信頼している』

との思いで、

「友よ」

と呼び掛けられたのでした。一方、宗教指導者達がさし向けた群衆は、剣や棒を持って現れ、イエス様に手を掛けて捕らえました。

その時、51節を見ますと、

「イエスと一緒にいた者の一人が、手を伸ば

して剣を抜き、大祭司の手下に打ちかかって、片方の耳を切り落としたり、

とあります。ヨハネ福音書には、この弟子がペトロであることが記されています。ペトロはイエス様の身を案じて、剣を用意していました。熱血漢のペトロです。イエス様に手を掛けた者を赦す訳にはいきません。しかし、剣を抜いても漁師の身、武術に長けていた訳ではなく、相手の片方の耳を切り落とすことで精一杯でした。

ところが、イエス様はそこで、52節に、

「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる。わたしが父にお願いできないとも思うのか。お願いすれば、父は12軍団以上の天使を今すぐ、送って下さるであろう。」

と言われました。1軍団は約六千人ですから、約7万人の天使が送られる事は可能でした。

しかし、54節に、

「それでは、必ずこうなると書かれている、聖書の言葉がどうして実現されよう。」

と言われました。

何故人は剣、即ち武器を持ち、武器を使うのでしょうか。それは相手を信頼出来ないからです。やられる前にこちらからやらなくては、自分の身の安全が確保出来ないと考えているからです。そのために歴史は武器を蓄えて来ました。事あるごとに争い合い、多くの血を流し、苦しみながら、人間はそれを終わらせようとはしないで、流血は復讐心を抱き、更に多くの武器をもって、相手は打ち倒すことに、必死になるのです。イエス様はこの敵意の応酬を止めさせて、人類が、神様に立ち帰り、神様に信頼し、人と人々が信頼し合える世界を開くために、神様に対して、人類の罪の赦しを求めて、人類の罪の贖いのために、十字架に架かられるのでした。

武器を持つ限り、この地上に平和はありません。イエス様は群衆に向かって、

「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持って捕らえにきたのか。わたしは毎日、神殿の境内に座って教えていたのに、あなたたちはわたしを捕らえなかった。」

と問い掛けられました。

イエス様は何時も丸腰で、正々堂々と、全ての人の前で、神様の教えを語られました。敵対者たちは、そんなイエス様を捕らえる事は出来ませんでした。彼らは嫉妬心や、自分の気に入らない、邪魔な存在として、イエス様を消したい一心でした。人間のそのような心の罪は、暴力となって、捌(は)け口を求めるのです。

彼らはそのために剣や棒を持って、その悪意を隠そうと、夜に襲って来たのでした。しかし、イエス様はそのような、彼らの悪意に関係なく、神様が預言者達を通して示してこられた、人類の罪からの救いのための、十字架への道を歩まれるのでした。イエス様は敵意と争いの応酬の歴史を終わらせるために、マタイ福音書、5章44節で、

「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。」

と教えられました。

イエス様は、その言葉の通りご自身に敵する者達の手で、十字架に掛けられながら、

「父よ、彼らをお赦し下さい。自分が何をしているのか知らないのです。」

と執り成し、敵を愛する愛で、人類の救いの道を開いて下さいました。イエス様は、人類に**真の平和をもたらすために**、十字架に掛かって下さいました。

人類にとって、**真の平和**は、先ず**神様を信じ、イエス様に従って行く事**です。イエス様の愛を受けた私たちは、イエス様に倣って、剣を振りか

ざす、即ち武器を取ろうとする社会に向かって、剣を打ち直して鋤とする生き方、即ち武力に頼らず、神様を信じ、人と人が**信頼し合い、助け合い、他者を生かす生き方**こそ、人類が平和に生きる生き方であり、神様の御心であることを語り、そのために私たち自身が平和の道具となって生きる生き方を示して行かなければなりません。具体的に何を成すべきか祈り求めて行きましょう。

「聖フランシスの平和の道具と成らせて下さい」を日々祈りつつ、キリストの平和を祈り求めてまいりましょう。

聖フランシスの「平和の祈り」をご一緒に祈りましょう。

主よ、わたしをあなたの平和の道具とならせ

憎しみのあるところに、愛を
争いのあるところに、許しを
分裂のあるところに、一致を
疑いのあるところに、信仰を
誤りのあるところに、真理を
絶望のあるところに、希望を
悲しみのあるところに、喜びを

闇には、光をもたらすものとしてください

主よ、慰められるよりも、慰めることを

理解されるよりも、理解することを

愛されるよりも、愛する事を私が求めますように

私たちは与える事によって、受け

赦す事によって、赦され

自分を捨てて死に、

永遠の命を頂くことができるからです

アーメン